

性格特性と催眠効果の関係

心理学科 20HP149 満留 彪

(指導教員:長野 祐一郎)

キーワード:催眠, 暗示, 性格, 特性

序と目的

催眠感受性尺度とパーソナリティ特性との関係を調べた研究はこれまで多く見られる(曲淵ら, 2022)。Barber (1956) はギルフォード・チンメルマン気質検査を用いて実験を行い、優越性(支配性)、社交性、情緒安定性及び客観性の欠如の4つの特性で、催眠感受性との間に有意な相関を得ている。また、Barber & Glass (1962)は催眠感受性には新しい対人関係を形成するレディネスや想像的活動や空想を好む傾向などが関連していると述べている。しかし、斎藤(1963)の矢田部ギルフォード性格検査を用いて催眠感受性との関係を調べる調査では、有意な相関は得られない結果となった。Cardena & Terhune (2014)によると催眠術にかかりやすい性格の相関を探ることについて、吸収性、空想傾向、イメージのいくつかの側面、などの概念的に類似した特性を除いては、ほとんど実を結んでおらず、催眠能力はパーソナリティ5因子モデル(FFM)の次元とは明確な関係を示さないとされている。先行研究では、催眠感受性尺度を用いて行われていたが、この尺度は、使用が臨床家などに限られ一般公開されていない。そこで本研究では、催眠に掛かった人と掛からなかった人の2つの群に注目することで、催眠効果と性格の関連性について明確にすることを目的とした。

方法

参加者:大学生31名(男性17名・女性14名)の参加者間計画で行った。

実験刺激:催眠課題として漆原(2020)の「指が近づく」と「指の硬直」の暗示文を引用しスクリプトを作成し、催眠実験に用いた。

群配置:催眠課題を行い、催眠に掛かったと答えた群15名と催眠に掛からなかったと答えた群16名の2群に分けた。ここでは催眠に掛かったとされる判断を、指を開こうとしても開けない状態(指の硬直)を催眠に掛かった状態と定義した。

心理指標:性格の測定には、日本語版 Ten Item personality Inventory (TIPI-J) (小塩他, 2012)を用いた。その際、10項目の質問から7件法を用いて、5特性を測定した。さらに催眠にかかったかどうかを聞く質問を作成し測定した。

実験手順:はじめに、性格検査への回答を行い、教示を行った後、実験を開始した。実験終了後にアンケート調査を行った。

結果

実験の結果から、催眠効果の有無によって各特性に差があるかを調べるため、群間の t 検定を行った。本結果では、外向性、協調性、勤勉性、開放性、神経症傾向のいずれにおいても有意差は得られなかった。しかしわずかなのであるが外向性で催眠にかかった群の得点が高くなっていた(図1)。

考察

本研究の結果では、5因子性格特性のどの因子においても有意差は得られなかった。このような結果になった要因として、方法においての妥当性が挙げられると考えられた。まず、群分けで言えば、実験後に指がくっついて開かなかった(催眠にかかった)のかどうかを聞く質問から、2群に分けたが、段階評定を用いずに分けたため、群分けの分類が不十分であったとも考えられた。次に、心理指標では、日本語版 TIPI-J を用いたが、10項目から測定することができるため、簡易に測定ができるが、小塩ら(2012)によると各下位尺度のペアを構成する項目間の相関係数がやや低いという点と協調性と神経症傾向は収束的、弁別的妥当性に疑問が残ると述べられている。そのため、Big Five (和田, 1996)と比較すると5因子性格傾向の測定が不十分であったとも考えられた。また、催眠にかかった群では、外向性が高くなっていたが、暗示に対する積極的な姿勢が催眠効果の有無に影響しているのではないかと考えられた。そして、本結果は、5因子モデルの次元とは明確な関係を示さないとされている、Cardena ら(2014)で述べられた研究を示唆するような結果であったため、性格5因子特性と催眠効果との関係は、示されない可能生も考えられた。今後の展望として、実験者の印象や信頼感を測定する尺度を用いるといった新しい視点を取り入れることで性格と催眠の関係を明確にできるといえる。

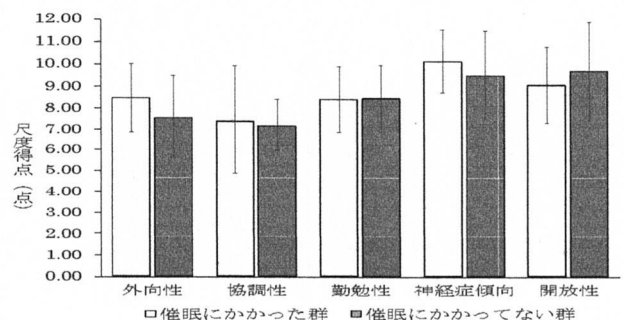


図1 群ごとの各人格特性得点

性格特性と催眠効果の関係

学籍番号 20HP149

氏名 満留彪

指導教員 長野祐一郎

序論と目的

【はじめに】

日本では、催眠が特殊なものとされているが、催眠は暗示を組織化した説得の一方法であるとされており、暗示は日常生活でも使われる身近な文語とされている（村野井，2018）。このように催眠というと多くの人の認識では、「あるかもしれない」程度にしか認識されていないといえる。ではなぜこういう認識なのかといえ、掛かる人と掛からない人の2つに分かれてしまうため、経験できない人は存在を疑ってしまうためである。そしてなぜ掛かる人と掛からない人の両者に分かれるかのメカニズムが解明しきれていないのも問題であるといえる。

【催眠のメカニズム】

催眠の原理に関しては、大きく分けて二つの説が存在し、一つは状態論(state theories)、もう一つは非状態論(nonstate theories)と呼ばれる説がある。状態論とは、「催眠は変性意識状態（トランス）という特殊な意識状態である」とする精神理論（高石，2012）のことであり、非状態論とは、「知覚や感覚、感情に関して、何か変化が起こるといった期待があった時にその変化が実現する現象である」とする、催眠を条件づけなどの通常の心理反応として捉えようとする社会認知理論（漆原，2020）のことである。

【催眠の定義】

米国心理学会催眠部門（APA Division 30）において、催眠現象の理論的な解釈にはたくさんのバリエーションがあると前置きした上で公表された、2014年に作られた定義が存在する。「催眠は暗示に反応する能力の高まりが、特徴的な注意の集中と周囲への気づきの低下を伴う意識状態」とされている。

【催眠研究における催眠感受性尺度】

催眠研究は、催眠感受性尺度を用いて行われる。よく一般的に使われるものとしてウォータルー・スタンフォード集団催眠感受性尺度（WSG）が使用され、低感受性、中感受性、高感受性に3つに分類されて分析される（Bowers,1988）。

【催眠と性格の関係性】

催眠感受性尺度とパーソナリティ特性との関係を調べた研究はこれまで多く見られる（曲淵ら，2022）。Barber（1956）はギルフォード・チンメルマン気質検査を用いて実験を行い、優越性（支配性）、社交性、情緒安定性、客観性の欠如の4つの特性で、催眠感受性との間に有意な相関を得ている。Barber & Glass（1962）では催眠感受性には新しい対人関係を形成するレディネス（学習）や想像的活動や空想を好む傾向などが関連していると述べている。しかし、斎藤（1963）の矢田部ギルフォード性格検査を用いて催眠感受性との関係を調べる調査では、有意な相関は得られない結果となった。

また、Cardeña & Terhune（2014）によると催眠術にかかりやすい性格の相関を探すことについて、吸収性、空想傾向、イメージのいくつかの側面、などの概念的に類似した特性を除いては、ほとんど実を結んでおらず、催眠能力はパーソナリティ5因子モデル（FFM）の次元とは明確な関係を示さないとされている。

【本研究の目的と仮説】

先行研究では催眠感受性尺度を用いて行われていたが、催眠感受性尺度は、その使用が臨床家などに

限られ一般公開されていない。そこで本研究では、催眠に掛かった人と掛からなかった人の2つの群に注目することで、催眠効果と性格5因子との関連性について明確にすることを目的とした。

催眠にかかった群は、暗示を行うことにより、指が閉じていき「実験者の暗示によってかかったのだろう」と思うことで、実験者との間に古典的条件づけが発生し、それが指の硬直まで促すものと考えた。よって外界への関心や興味の側面が強い、外向性と開放性において得点が高くなるという仮説を立てた。

方法

参加者

文京学院大学の大学生 31 名（男性 17 名・女性 14 名）の参加者間計画で行なった。

実験刺激

催眠課題として漆原(2020)の「指が近づく」と「指の硬直」の暗示文を引用しスクリプトを作成した。作成したものを実験者が暗示として実験協力者に伝えた。音読ではなく会話の要領で伝えた。

群配置

催眠課題を行い、催眠に掛かったと答えた群 15 名と催眠に掛からなかったと答えた群 16 名の 2 群に分けた。ここでは、「指を開こうとしても開けない状態（指の硬直）」のことを催眠に掛かった状態と定義した。

心理指標

性格の測定には、日本語版 Ten Item personality Inventory (TIPI-J) (小塩・阿部・カトローニピノ, 2012) を用いた。その際、1“全く違う”から 7“全くそうだ”の 7 件法を用いて、外向性、協調性、勤勉性、開放性、神経症傾向の 5 特性を、全 10 項目の質問からなる質問から測定した。

質問紙調査

実験前に日本語版 Ten Item personality Inventory (TIPI-J)の収集を Forms

(<https://forms.office.com/r/6ZP8kc2wBY>) で行い、実験後に、指がくっついて開かなかった（催眠にかかった）のかどうかを聞く質問を Forms (<https://forms.office.com/r/KqXpMdDhzY>) で収集した。

実験手順

はじめに、性格検査への回答を行い、教示を行った後、実験を開始した。実験終了後にアンケート調査を行った (図 1)。

教示

実験開始前に実験参加者に向けて以下の教示を行った。「まずは実験に参加して頂きありがとうございます。この研究では催眠による実験を行います。催眠というと操られるというイメージが強いとは思いますが、催眠とは知覚・感覚・感情に対して何か変化が起こるという期待があった時に、その変化が実現する現象のことで、あなたの意志に関係なく起こるものではありません。もしも実験の途中で気分が悪くなったりしたら中止して頂いて構いません。それでは質問等がなければ実験に移っていきたくと思います。」

暗示文

「それではこれから指の接近テストを行いたいと思います。まずは両手を胸の前で組んで人差し指を 2 本立ててください。」と指示しながら実験者がやってみせた(図 1)。「私が 1 度手を叩いたらこんなふうに指を開いてください」と人差し指の間隔を 5~10cm 手を開いて手本を見せた。次に、「それでは自分

の指に注意を向けてください」と指示したら、手を叩き、参加者が指を開いたところで「間をじっと見てください。指と指の間を見つめていると、指がだんだん閉じていきます」と5回程度続ける。指がくっついた所で「指がもうくっついてしまいました。まだじっと指を見続けてください。そうすると指と指がさらにくっついていきます。隙間がなくなっていくます。まるで接着剤でくっついてしまったかのようにびたりとひっつきます。ほらもう開こうとしても開かないですよ。」と投げかけ、参加者に開かせるように指示した。暗示が成功して手の硬直が起こった場合は、「一度手を叩くと、指が開きます」と伝え暗示を解除した。成功せず指が開いてしまった場合は「まだ開きますか。結構です。それでは楽にしてください」と手を解くことを指示した。

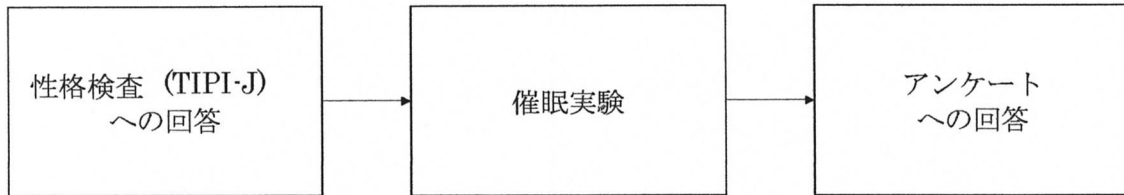


図1 実験の手順



図2 暗示の様子

結果

まず、各性格特性得点について群ごとに平均値と標準偏差を算出した。さらに、縦軸を尺度得点、横軸を各群としてそれぞれグラフを作成した（図3、図4、図5、図6、図7）。なおエラーバーは標準偏差を示した。

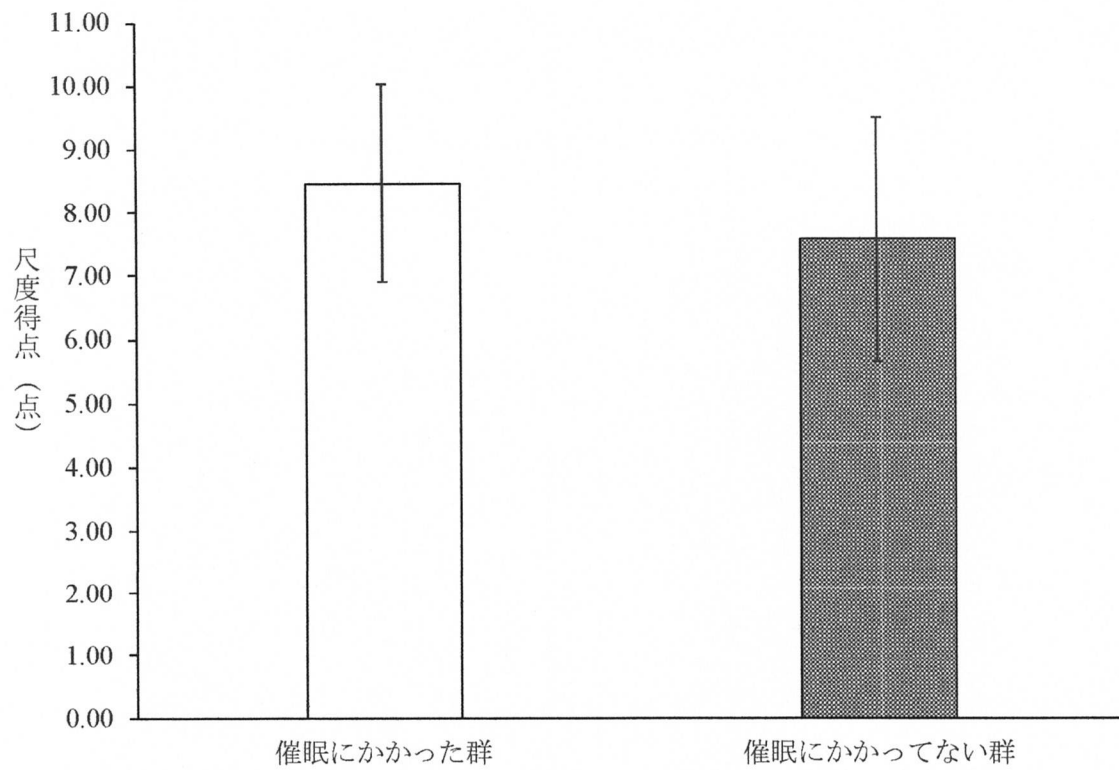


図3 群別における外向性尺度得点

図3を見ると、催眠にかかった群の外向性尺度得点が少し高くなった。実験の結果から、催眠効果の有無によって外向性に差があるかを調べるため、群間の t 検定を行った。外向性では有意差は認められなかった ($t(28)=1.45$, ns)。

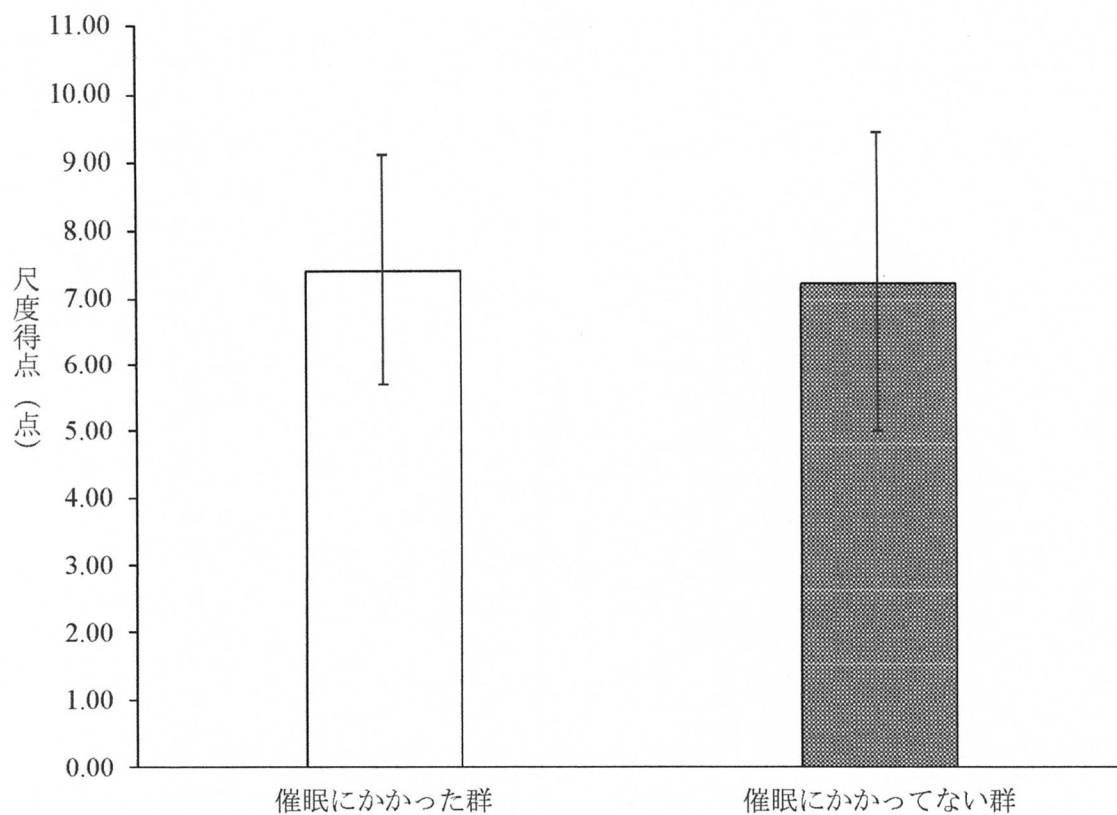


図4 群別における協調性尺度得点

図4を見ると、催眠の効果に関係なく同程度の尺度得点だった。ばらつきは、催眠にかかった群で大きくなっていた。実験の結果から、催眠効果の有無によって協調性に差があるかを調べるため、群間の t 検定を行った。協調性では有意差は認められなかった ($t(19)=0.29, ns$)。

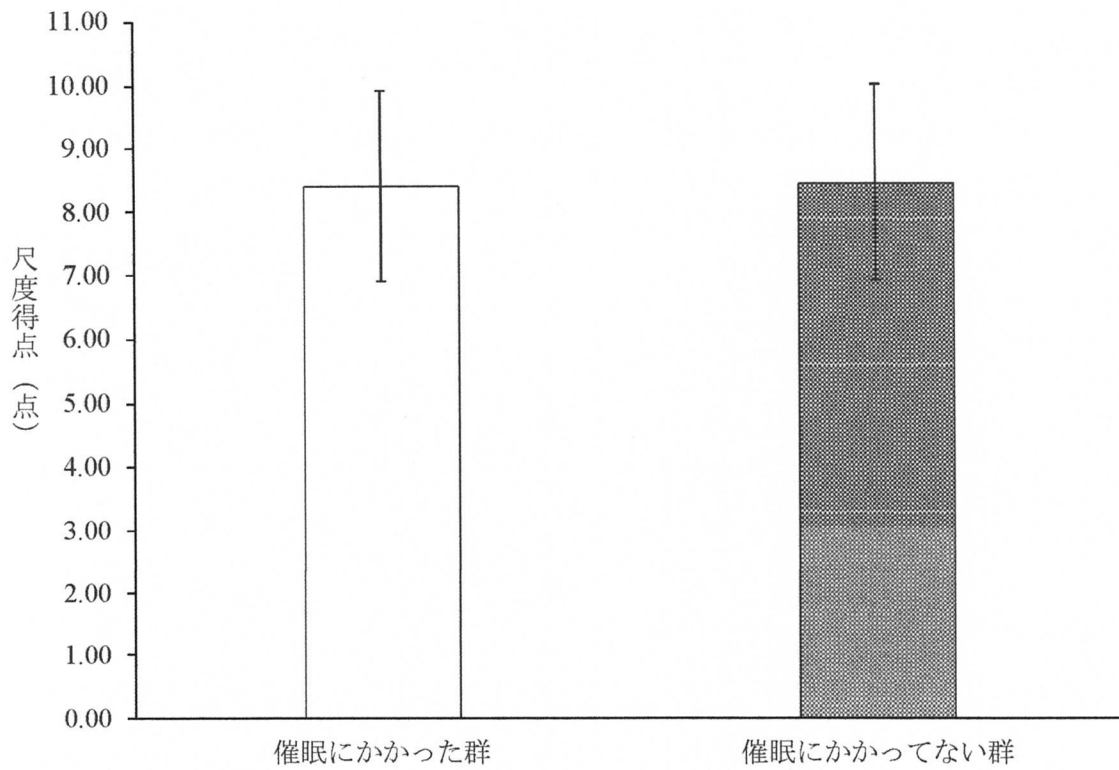


図5 群別における勤勉性尺度得点

図5を見ると、催眠の効果に関係なく同程度の尺度得点だった。催眠効果の有無によって勤勉性に差があるかを調べるため、群間の t 検定を行った。勤勉性では有意差は認められなかった ($t(28)=0.07, ns$)。

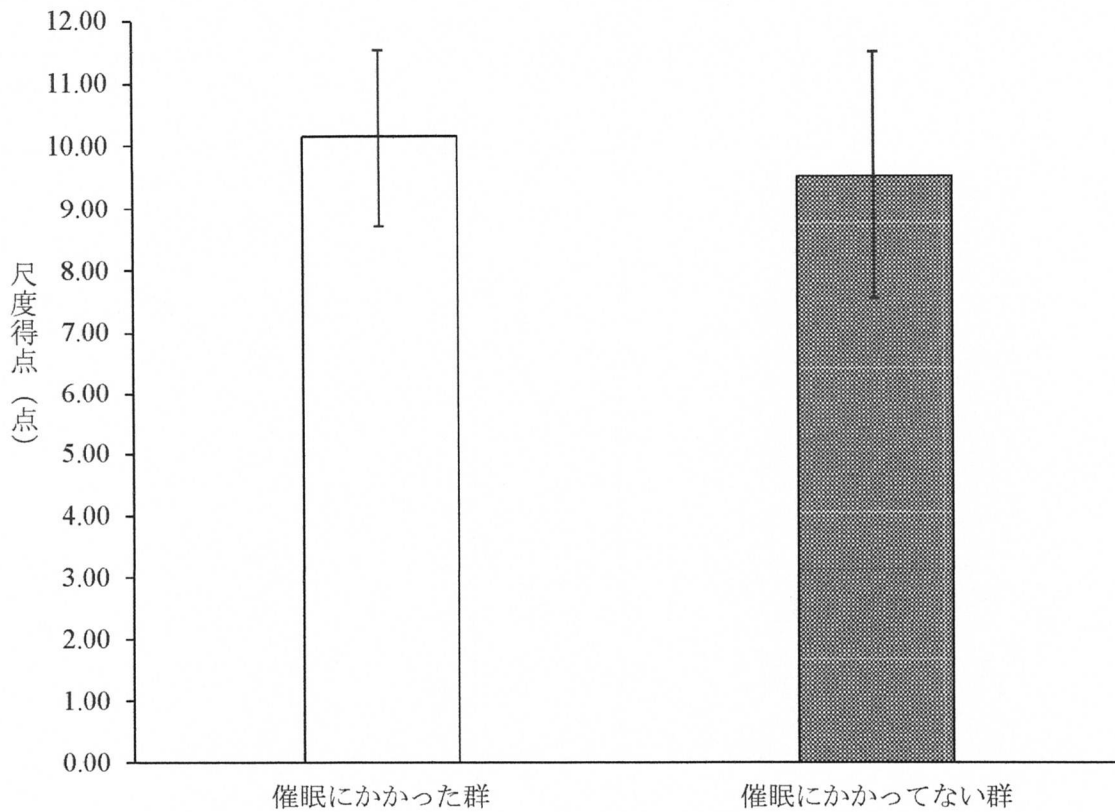


図6 群別における神経症傾向尺度得点

図6を見ると、催眠の効果に関係なく同程度の尺度得点だった。ばらつきは、催眠にかかってない群で大きくなっていた。実験の結果から、催眠効果の有無によって神経症傾向に差があるかを調べるため、群間の t 検定を行った。神経症傾向では有意差は認められなかった ($t(27)=1.03, ns$)。

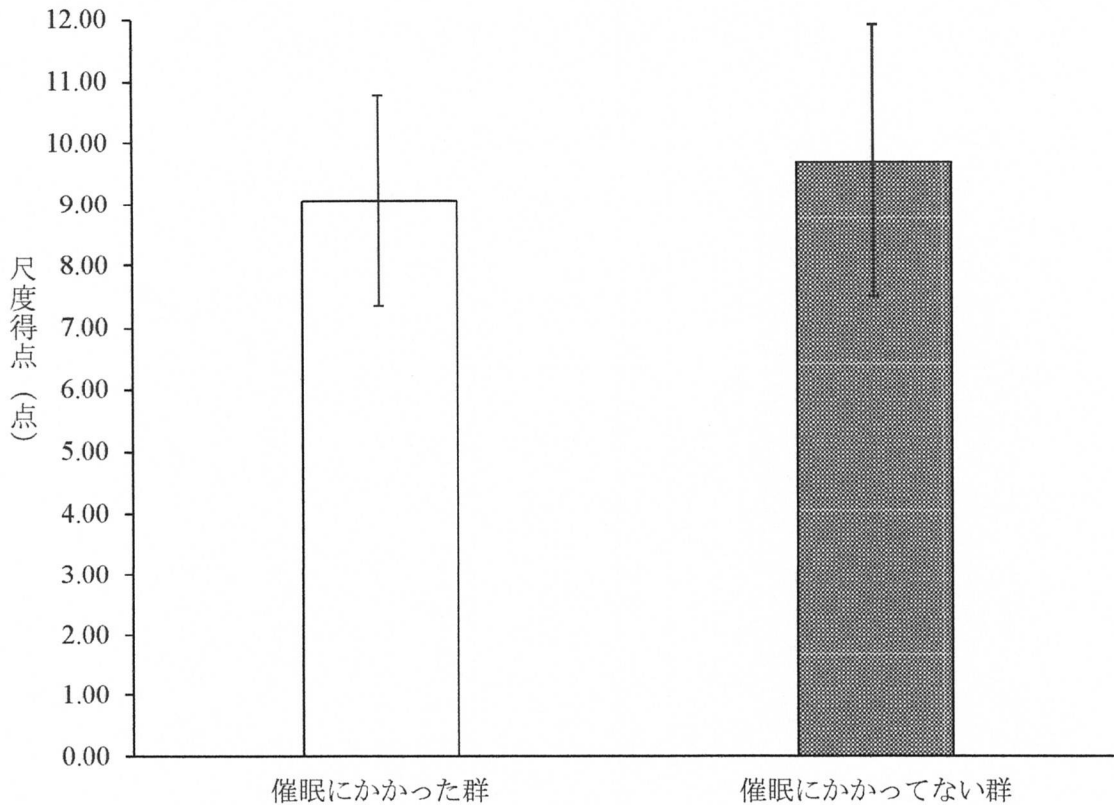


図7 群別における開放性尺度得点

図7を見ると、催眠の効果に関係なく同程度の尺度得点だった。ばらつきは、催眠にかかってない群で大きくなっていた。実験の結果から、催眠効果の有無によって開放性に差があるかを調べるため、群間の t 検定を行った。開放性では有意差は認められなかった ($t(28)=0.88, ns$)。

考察

本研究の目的は、催眠に掛かった人と掛からなかった人の2つの群に注目することで、催眠効果と性格の関連性について明確にするものであった。本研究では、暗示を行い、催眠効果の有無についてのアンケート調査から、催眠にかかった群とかがかってない群の2群に分け、5項目の尺度得点について、平均値と標準偏差を算出した。その後、群によって違いがあるかを比較した。

本研究の結果では、外向性、協調性、勤勉性、開放性、神経症傾向のいずれにおいても有意差は得られなかった。このような結果になった要因として、方法における妥当性が挙げられると考えられた。まず、群分けで言えば、実験後に、指がくっついて開かなかった(催眠にかかった)のかどうかを聞く質問から、2群に分けたが、段階評定を用いずに分けたため、群分けの分類が不十分であったとも考えられた。次に、心理指標では、日本語版 Ten Item personality Inventory (TIPI-J)を用いたが、10項目から5因子を測定することができるため、簡易に測定ができるが、小塩ら(2012)によると各下位尺度のペアを構成する項目間の相関係数がやや低いという点と協調性と神経症傾向は収束的・弁別的妥当性に疑問が残ると述べられている。そのため、従来の Big Five (和田, 1996) と比較すると少し尺度の選定が不十分であったとも考えられた。よって、催眠の効果と性格の関係を適切に判断するためには実験計画の適切なデザインが重要であると考えられる。

また、わずかな差ではあるが催眠にかかった群は、外向性が高くなっていた。外向性とは「社会的である」「明るい」「新しい状況や新しい人々に積極的に関与する」「話をするのが好き」という要素を持つ性格特性（和田，1996）であり、暗示に対する積極的な姿勢が催眠効果の有無に影響しているのではないかと考えられた。しかし、本研究の仮説を示唆するほどの結果ではないため、参加者を増やすことでさらなる検討ができるといえる。

そして、本結果は、5因子モデルの次元とは明確な関係を示さないとされている、Cardeñaら（2014）で述べられた研究を支持するような結果であったため、性格5因子特性と催眠効果との関係は、示されない可能生も考えられた。そのため空想傾向、吸収性、などの自己に関する深い特性を尺度として用いることで比較を可能にするといえる。

今後の展望として、実験計画の見直しと実験者の印象や信頼感を測定する尺度を用いるといった新しい視点を取り入れることで、催眠効果の有無と性格特性の関係性がより明確になるのではないかと考えられる。

引用文献

- Barber, T. X., & Glass, L. B. (1962). Significant factors in hypnotic behavior. *The Journal of Abnormal and Social Psychology*, 64(3), p222–228.
- Bowers, K. S. (1988). Waterloo-Stanford group Scale of hypnotic susceptibility form c: Manual and response booklet, *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis*, 46(3), 250-268
- Cardeña, E., & Terhune, D. B. (2014). Hypnotizability, personality traits, and the propensity to experience alterations of consciousness. *Psychology of Consciousness: Theory, Research, and Practice*, 1(3), 292.
- Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 91-101.
- 曲淵由美子・長谷川明弘（2022）HIP 催眠感受性尺度日本語版作成のこころみ 日本催眠医学心理学会第67回大会口頭発表2
- 村野井均（2018）催眠がかかる仕組みとその誘導法 茨城大学教育学部紀要（教育科学）67,619-631
- 小塩真司・阿部晋吾・カトローニピノ（2012）日本語版 Ten Item personality Inventory (TIPI-J)作成の試み パーソナリティ研究 21,40-52
- Roche, S. M., & McConkey, K. M. (1990). Absorption: Nature, assessment, and correlates.
- 齋藤稔正（1964）催眠感受性と性格特性に関する研究, 催眠学研究, 第8号, p45-53.
- 高石昇（2012）現代催眠原論 金剛出版
- 漆原正貴（2020）はじめての催眠術 講談社現代新書出版
- 和田さゆり（1996）性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, 67,61-67